

令和7年度 奈良県租税教育推進連絡協議会会長賞

「誰かの助けになる税金」

宇陀市立大宇陀中学校 3年 岸本 有加

日本は地震や台風などの自然災害がとても多い国です。東日本大震災や阪神・淡路大震災、豪雨による洪水で、多くの人が被害にあい、家や生活を失ってしまいました。そんなときに力になるのは「税金」です。壊れた道路や橋の修復、避難所の設置と運営には、多くの税金が使われています。

例えば、津波警報や避難情報を出す気象庁のシステム、防波堤や堤防などの施設も、税金によって整備されています。もし設備がなければ、災害による被害想定はもっと大きくなってしまうでしょう。先月のカムチャッカ半島の地震による津波でも、日本に大きな被害がなかったのは、税金を使って整備されてきた防災の仕組みが役立っているからだと思います。また、災害のあとにも税金は使われます。家を失った人が一時的に住む仮説住宅の建設などにも多くの費用が必要です。もし税金がなかったら、被災した人々は安心して生活を立て直すことができません。つまり税金は、私たちの生活を支えるだけでなく、いざというときに命や生活を守るための「備え」もあるのです。

私は、正直なところ、「税金は大人が払うお金で、自分にはあまり関係がない」と思っていました。しかし、私も将来は必ず払わなければならないお金です。そしてそのお金が、どこかで困っている人を助ける力になるのだと思うと、少し見方が変わりました。自分が払う税金が、誰かの命を救ったり、町を復興させる手伝いになるかもしれないのです。

もちろん、税金は災害だけでなく、教育や医療、公共交通などにも使われています。私たちが毎日通っている学校も、教科書も、教室の電気や暖房も、すべて税金によって支えられています。こう考えると、税金は「もしものとき」だけではなく、「ふだんの生活」も守ってくれているのだと分かりました。

先月のカムチャッカ半島の地震をきっかけに、私は税金について初めて深く考えました。私は、税金には「助け合い」の気持ちが込められていると思います。税金を払うことは、自分のためだけでなく、誰かを助けることにもつながる行動なのではないでしょうか。将来大人になって沢山の種類の税金を払うときは、税金を「ただ取られるもの」だと考えるのではなく、「みんなで支え合うために出し合うもの」だと受け止めたいです。